購読者に電子メールで送信したものをそのまま掲載しています。等幅フォントでお読みください。

＜ＣＵＥ＞利用教育委員会通信　第64号（17巻4号）　　2007.2.6 発行

──

■■■ ■　■ ■■■　　利 用 教 育 委 員 会 通 信
■　　■　■ ■■　　日本図書館協会図書館利用教育委員会
■■■ ■■■ ■■■　　JLA The Committee of User Education

──

・「＜ＣＵＥ＞利用教育委員会通信」は，日本図書館協会図書館利用
　教育委員会の最新のニュースをお伝えするメールマガジンです。
・＜ＣＵＥ＞とは，Committee of User Education の頭文字です。
　英語の「cue」はスタートの合図の意。利用教育の普及への願いを
　込めた誌名です。
・利用教育関連の情報をお寄せください。
・メールマガジンに関するご意見，ご要望はこちらへ。cue@jla.or.jp

==

□　目次

(1)第９回図書館利用教育実践セミナーのお知らせ
(2)第８回図書館総合展セミナーの報告
(3)図書紹介
(4)編集後記
(5)利用教育委員会委員

==

(1)第９回図書館利用教育実践セミナーのお知らせ

●2007年3月10日（土）9:30～12:40

　　情報リテラシー教育をめぐる最近の論点
　　－国内外の事例から実践のヒントを探る－

●講演１：情報リテラシー教育をめぐる研究・政策・実践の動向－「指
　　　　　導サービス」レベルアップのための企画・運営を考える－

　　講師：野末俊比古氏（青山学院大学）

情報リテラシー教育をめぐる研究・政策・実践の動向について，わが国の状況を中心に整理，分析したうえで，大学図書館が「指導（インストラクション）サービス」を展開していくにあたってヒントとなる（あるいは検討の必要な）事柄を提示してみたい。

●講演２：大学図書館が実施する情報リテラシー教育と図書館員に求められる専門的能力－米国の事例を中心に－

講師：長澤多代氏（長崎大学）

米国の大学図書館の例をもとに，情報リテラシーがどのようにとらえられ，情報リテラシー教育としてどのような取り組みがあるのかを紹介する。具体的には，まず，学生に求められる情報リテラシーについて理解を深めるために，情報リテラシーの基準及び情報リテラシー教育の枠組みを概観する。次に，情報リテラシーを育成する方法について，米国の大学図書館が実施する情報リテラシー教育の事例をもとに，印象づけ，サービス案内，情報探索法指導，情報整理法指導，情報表現法指導の各段階で実施されているプログラムを紹介する。また，教員への直接的な教育活動の支援（教育支援）が学生の情報リテラシーの育成に重要な影響を与えることから，教育支援の事例も併せて紹介する。最後に，ブレンディッド・ライブラリアンに求められる専門的能力を紹介しながら，情報リテラシーを担当する図書館員に求められる専門的能力を提案する。

■会　場：キャンパスプラザ京都　第３講義室（４階）
http://www.consortium.or.jp/campusplaza/guidance.html
■対象者：図書館職員，教職員，JLA 会員，図書館関係団体，他
■主　催：日本図書館協会
■参加費：会員 500 円／非会員 1000 円
■定　員：170 名，先着順受付。当日受付もあり（満席の場合は立ち見またはお断りすることがあります）。
■締　切：3 月 2 日（金）
■申込先：電子メールで下記の内容を日本図書館協会事務局まで。
送信先：cue@jla.or.jp
■詳　細：利用教育委員会ホームページ　http://www.jla.or.jp/cue/

●申込書

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

《第９回図書館利用教育実践セミナー》参加申込書：

［2007 年 3 月 10 日（土）］

■申込日：
■氏名（氏名ヨミ）：
■JLA 会員／非会員（会員の場合は会員番号：　　　　　　　　　　　）
■所属：
■住所：
■電話番号：
■電子メール：

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

※記入いただいた情報は，今回の研修の企画・運営の参考にするほか，今後，研修等の情報をお送りする場合などを除き，利用，公表することはありません。

===

(2)第８回図書館総合展セミナーの報告

情報検索指導法の初級編に引き続き，中級編を開催
－多数のプラス評価，全国各地での開催要望も－

日本図書館協会（企画・運営：図書館利用教育委員会）は，昨年 11 月 22 日，パシフィコ横浜で行われた第８回図書館総合展において，講演会を開催しました。今回は，仁上幸治氏（早稲田大学図書館）を講師に迎え，「情報検索指導における良い例題・悪い例題（中級編）－専門分野別データベースの特徴を紹介する方法－」というテーマで講演が行われました。

仁上氏は，講演で，初級編の復習を行ったのち，利用者が検索できない理由，データベース講習会の内容，図書館の説明が分かりにくい理由，図書館員に求められる専門性について述べました。このうち，図書館員に求められる専門性としては，要約力，表現力，説明力，指導力があると指摘しました。最後に，情報リテラシー教育への貢献策として，(1)データベースのシステム改良，(2)授業科目と講習会との統合，(3)司書課程の改革，(4)研修の改善を提案しました。講演後には，質疑応答が行われ，参加者からは，講習会での失敗談や講習会の参加者を集める方法などについて質問がありました。

この講演会には，大学を中心とした各館種の図書館員や教員など161名が参加しました。アンケートでは，講演会に参加して「大変良かった」という回答が42%，「良かった」という回答が43.5%で，良いという評価が85.5%に上りました。評価としては，「本当に目からウロコ」「テンポが良くてわかりやすい」「楽しくてためになる」「話が軽快で面白い」「やる気にさせる」などの多数のプラス評価と，「時間不足が残念」「中級編のさわりまで」「具体例不足」など一部マイナス評価がありました。また「対象者別分野別」「学校図書館員対象も」「ワークショップ形式で」「ポイントを絞って数回で」などのほか，初級編を含めて全国各地での講習会開催の要望が目立ちました。

（春田和男／筑波大学大学院生）

==

(3)図書紹介

図書館を創造的な学習や仕事の場として活用するためのヒントを書いた本５冊

１．創造性の４B（前号のつづき）

前号の「図書紹介」の最後に書いたように，創造的なアイデアを生み出したり，創造性を養ったりするための環境を整備することは，仕事のためだけでなく，一般の学習・教育・訓練のための大きな課題である。そこで「創造性の４B」として挙げられていたのは，バー（Bars），バスルーム（Bathrooms），バス（Busses），ベッド（Beds）であった。これらは頭の冴える場所なのだ。眠る寸前に浮かんだアイデアや夢に見た光景を書きとめるために，枕元にメモを置いたり，入浴中に思いついた課題の解決法を浴室の窓にメモしたり，酒場で仲間と飲みながら出てきた素晴らしい考えをコースターに書きなぐったりということは，誰にでもできる，日常的なことである。バスや列車で移動中に，あるいは旅行中に発見したり，思いついたりすることも多い。このような場は，比較的，じっくりと考えることができる所でもある。こんな場所を人為的に作り，そこで仕事をしたり，学習したりできれば理想的であろう。

（前号紹介の『スウェーデン式アイデア・ブック』フレドリック・ヘー

レン著，中妻美奈子監訳，鍋野和美訳，2005 年 3 月，ダイヤモンド社発行，p.63 参照）

２．『スウェーデン式アイデア・ブック２』フレドリック・ヘーレン，テオ・ヘーレン著，中妻美奈子監訳，フレムリング和美訳，2006 年 7 月，ダイヤモンド社発行，79p.

この本は，前回紹介した上記の本の続編である。ここには，大人が子どもに学ぶ，自由な発想法が紹介されている。その p.60 から p.61 までには，「２４．創造性 vs. 学校―正しく考えるより、自由に考える―」という項目があり，いつの日か，メッセージとしての「正しく考えることは偉大であるが，自由に考えることはさらに偉大である」という碑銘がウプサラ大学の建物に掲げられる日がくることを願うと書かれている。正しく考えることを学んだ上で，自由に考えることを育まないと，学校は死んでしまう。自由に考えることができる最適の場所が図書館である。

３．『FILING－混沌のマネージメント―』株式会社竹尾編，織咲誠，原研哉，日本デザインセンター原デザイン研究所企画／構成，2005 年 4 月，宣伝会議発行，184p.

ファイリングと書いてあるから，ファイリングシステムの教科書かと思うかも知れないが，そうではない。全く反対に，「机の上を片付けてはいけない」「身の回りの仕事環境から苔のように，あるいはカビのように興味というものが培養されてくる。そこにどう水をやり栄養を与えていくかということ。」などというコピーが帯カバーにならび，さらに「脱・整理術―創造のためのファイリング。情報を活性させる方法とは」とある。

「１．輝きを混沌の中からつまみだす」の章では，編集者の混沌デスク，平凡社の編集記録（大学ノート），平凡社・岩波書店の編集室の一角，ポール・スミスのシステム手帳，バックミンスター・フラーのクロノファイル（時間軸に沿って蓄積され整理されたフラー自身の記録），田中一光の「色の引きだし」（色が透明なプラスチックの引きだしに入っていて，外からよく見える），立花文穂の「ダイヤリー」（旅の記録として現地で集めた素材を本に仕立てた。現物の表裏をコピーして綴じた本もある），織咲誠のマテリアルファイル（実物を透明ポケットファ

イルに収納したもの），銀閣寺の苔ファイル（仕切られた升目の箱に苔の実物が生えている。分類は「とても邪魔な苔」「ちょっと邪魔な苔」「銀閣寺の大切な苔」などで，それぞれの名札は全てが正式名称とは限らず、俗称を含む名称が書かれている），箱――ぴったりを発見する（ファイルする実物に合わせて容器を探し，それに整理する）などが，写真を中心に掲載されていて，見ているだけで，ファイリングの魅力に引き込まれてしまう。

その後の章は，２．ほしい情報にたどり着くためのインターフェイス，３．ディテールに蓄えられた知恵，４．モジュールを調停する，となっており，読み進むにつれて，創造的な脱・整理術の世界が少しずつ開けてくる。

図書館では，全ての資料が整理され，整然と配置されていると考えられがちであるが，必ずしもそうではない。図書は図書館分類で排列してあるが，新着図書は分類排列から除外されている。雑多な内容のものが集まっているので，最も興味を引き，利用されるのである。雑誌は誌名の五十音順に並んでいることが多いので，その内容は混沌としており，創造性に結びつきやすい。新聞やパンフレット資料も同様である。混沌のマネージメントという観点から，図書館資料全体の配置を考えるのも，創造性の開発には利用者だけでなく，図書館員にも大いに役立ち，新しい図書館構想の開発につながるのではないかと思う。

４．『POST-OFFICE―ワークスペース改造計画―』岸本章弘，仲隆介，中西泰人，馬場正尊，みかんぐみ共著，2006 年 2 月，TOTO 出版発行，343p.

「ワークスペースをデザインすることは，この時代の大きな命題になるだろう。」と帯カバーに書いてある。さらに「働き方が変われば，その環境も変わる。」とも書いている。日本では事務系といわれた人たちが，机に座っていれば仕事をしていることになっていた時代が長く続いた。しかし，「多様化する職種，流動化する組織や勤務形態，コミュニケーションツールの進化，そして働くことの目的や意味の変化等々の複合要因が働き方を決定的に変化させている。」

そこで「ワークデザイン」という考え方が重要になる。ワークデザイ

ンとは，働く環境のデザインを意味する。働く環境とは，単なる場所（スペース）だけを指すのではなく，そこで使われる道具（ツール），そこでの働き方や制度，組織（スタイル）を含む概念である。

知的な仕事の質を向上させるためには，ワークデザインに十分な配慮をしなければならない。急激な社会の変化，価値観の多様化，働く意味の変化などが，ワークスタイルに影響を及ぼし，働く場所が執務空間から離れて無限に広がり，仕事の内容も複数の分野にまたがる課題に取り組む機会が増えた結果，コラボレーションと多様化が普通になった。情報ツールを駆使して仕事を進めることがあたりまえになった。さらに，働く環境を自分でコントロールし，デザインすることが重要になってきた。

組織レベルのワークデザインが必要な時代になったのである。そのポイントは４つ。すなわち，(1)相互作用の活性化，(2)活動，能力，仕事の可視化，(3)発想支援，(4)アイデア・経験の資源化である。これら４つには，スペースの要素がそれぞれに含まれている。そこで，本書の扱っている「オフィスとスペース」が重要な要素になるのである。図書館を仕事や学習の場として，効果的なデザインスペースを配置するためのアイデアが集約されている。現代の図書館は，ひまな人が，特に本が好きな人だけが利用する場所ではないのである。

５．『考具』加藤昌治著、2003 年 4 月、ティービーエス・ブリタニカ(現阪急コミュニケーションズ)発行，239p.

本書では，「考えること」あるいは「企画すること」を仕事にする人のための「考えるための道具」を『考具』と呼んでいる。考具を手にすれば，アタマとカラダが「アイデアの貯蔵庫」「企画の工場」に変わると書いてある。

第６章では，「情報メディア」「プロダクト」「リアルな環境」「オリジナルアイテム」について記述している。これらは全て図書館そのものである。例えば，本，新聞雑誌，ウェブサイト，辞書，地図，データベース，椅子，机，人間，空間，スクラップブック，情報ファイルなどである。図書館は考えるための道具，考えるための空間であると考えることができる。

（戸田光昭／駿河台大学名誉教授）

==

(4)編集後記

第64号をお届けします。今号では，３月に開催する京都セミナーのお知らせを掲載しました。関心のある方はぜひご参加ください。多くの皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。（春田）

==

(5)利用教育委員会委員

（委員長）
毛利 和弘 ：亜細亜大学学術情報課
（委員）
青木 玲子 ：埼玉県男女共同参画推進センター
赤瀬 美穂 ：京都産業大学図書館
有吉 末充 ：京都学園大学人間文化学部メディア文化学科
石川 敬史 ：工学院大学図書館
木下 みゆき ：大阪府立女性総合センター情報ライブラリー
野末 俊比古 ：青山学院大学文学部
春田 和男 ：筑波大学大学院博士課程
和田 佳代子 ：昭和大学歯科病院図書室
久保木いづみ ：日本図書館協会事務局

＜ＣＵＥ＞利用教育委員会通信　第64号（17巻4号）　2007.2.6 発行

・バックナンバー
http://www.jla.or.jp/cue/
・配信登録・変更・解除・お問い合わせ
cue@jla.or.jp

※本紙は Yahoo! Groups を使って発行していますが，日本図書館協会および当委員会，ならびに本紙の内容と Yahoo! とは関係がありません。

戻る